

企業行動研究部会（#334）議事録

日時：2024年 7月8日（月） 18：00～20：00

場所：リモート会議

参加者（16名）

●事務局連絡

○年次総及び研究発表大会（2024.6.29～30 会場：関西大学高槻キャンパス）

- ・総会内容：37名（リアル）13名（オンライン）+119名（委任状出席）全体で169名が参加
- ・2023決算報告、監査報告、2024活動報告及び予算案
- ・会則改定の件（正会員と賛助会員のいずれかに）の、承認がなされた
- ・本年度の水谷賞の該当者はなし
- ・研究発表大会はリアルのみで開催されたが、総会の中で、特にシンポジウムについてはオンライン（及びリアル）で行うべきではという意見が多くあった
- ・大会&シンポジウムの録画・資料の提供に関しては、現在提供するか否かを検討中
- ・研究発表大会は87名の有償参加者があった
- ・オプションで、アサヒビール吹田工場の見学が行われたが、キャンセル者が多かった
- ・当学会による企業の表彰制度を検討したらといった意見があった

●研究発表

テーマ：「最新生成AI事情（倫理的役割を考える）」

発表：永井郁敏 部会員

概 要

ミーティングでは、デジタル化やAIの進展など、技術的トピックが議論されました。参加者は、AIの潜在的な影響と規制、生産性向上への期待と倫理的懸念について意見交換が行われ、また中小企業の課題やAIの可能性についても言及がありました。

生成AIに関する全般的な説明が行なわれ、参加者はAIの可能性と課題について言及が行われ、コーチングやカウンセリング、選挙などでのAI活用が話題となり、生産性向上や経済発展への期待が示された一方で、セキュリティや倫理面での懸念も提起された。また、EUのAI規制法や国際的な規制の方向性についても言及があった。犯罪予測、遠隔生成、設定認証などの様々なトピックについて全般的に解説が行われた。

2年後に施行される益生法について懸念を表明し、AIやデジタル化の進展速度に疑問を呈した。また、中小企業のデジタル化とSDGsの推進の難しさ、社内コミュニケーションの数値化の重要性、そして変化する世界に適応する必要性について言及した。さらに、AIの急速な発展と多様なプレイヤーの存在、およびAI学習に必要な膨大な電力消費についても触れた。

該社は、近時、中規模の不祥事を繰り返したが、今回の重大事故でハインリッヒの法則に合致することとなったと考えられる。また、事件の要素を分析してみると、偏に組織風土に起因するものといえる。

○意見交換・質疑応答（抜粋）

- 生成AIの膨大な電気使用量の問題。生成AI提供者から税金を取ることも検討されている中、電力消費の視点から生成AIをどう考えているか？またNVIDIAの半導体に関して、今後どのようなになるのかを知りたい？
 - 電力消費の問題に関しては、将来的には生成AI（汎用人工知能として）が新たな電力の生成手法を提示するようになるだろう。
 - NVIDIA社がリードするGPUではあるが、ARM社の動向も興味があるところである。
- 人の能力が高いとする生成AIだが、所詮コンピューターであることから、生成AIと何が異なるのかがよくわからない。しかし、所詮コンピューターであるのであれば、恐れるに足る対象ではないのではないかと？つまり人間を超えるものではないだろうと思っている。特に理性や感性はAIでは理解できないだろう。これらを超える能力を超越するのだろうか？
 - 現時点で検索という視点で考えればGoogleと大きな違いはないかもしれないが、コンテンツを生成するという観点から考えると、格段の違いがある。特に文字や静止画、映像や音声といったマルチモーダルな対応が現在急速に発展している。深層学習によりAIは自分自身で学習することもできるため、人の能力をはるかに超えた記憶とこれらの情報を用いた情報の提供は、人の能力の比較ができる対象ではない。
- カウンセリングやコーチングにも生成AIの導入が行なわれており、成果が出始めている。経営会議における意思決定支援も欧米ではすでに行われ始めており、意思決定の最適化（リスクマネジメント等を踏まえること）に貢献している。
- 言葉だけではなくカメラによる顔つきの変化や音声データによる声の変化（スピードや高さ）、体の動きの変化など、非言語系におけるセンサー技術と、AIの分析力が、人の知覚能力を超えた、精度の高いカウンセリングやコーチングのツールとして機能し始めている。
- 教えた情報だけからしか判断できない生成AIなので、入力データの限界があり、人間が考えたロジックであるため、創造活動（理性や感性を踏まえ）はできないのではないかと？
 - デジタル化された情報であれば全て教示データとして入力が可能であるため、AIにどこまでを許可するかの判断が重要になるが、リスクを伴う判断になる。
- 現時点ではコンピューターとAIは別々に存在しているが、近い将来は一つのものとしてAIがコンピューターを巻き取っていくのではと考えている。コンピューターから人工知能への転換だと言えるだろう。
- AIにおける倫理的国際基準としては、先月欧州AI規定が採択されているが、最終答申として確立されるのは2026年の2年先になる。果たして2年先にどのようなAIが生まれているのか、これらの規定がどこまで役に立つのか、まさしくスピード勝負になっている。
- 人材の最適化と人材不足を解消にAIの開発が行われているが、現時点ではAI技術者不足であり、必要となるAI技術も目まぐるしく変化するため、技術者のスキルセットも大変になっている。

以上